大陸棚の法律

海上保安庁

日本語叢書

「する」と「なる」の言語学

——言語と文化のタイポロジーへの試論——

池上嘉彦著

著者略歴
池上嘉彦（いけがみよしひこ）
1934年京都市の生まれ．1961年東京大学大学院英語英文学博士課程修了．1965-67年，イェール大学大学院言語学科留学．1969年，同 Ph. D. フンボルト財団研究員(1974-76)，ミュンヘン大学客員教授(1982)，インディアナ大学客員教授(1985)，ロンドン大学 Longman Research Scholar (1986-87)．現在，東京大学名誉教授，昭和女子大学教授　主な著書：『英詩の文法』（研究社），『意味論』（大修館書店），『意味の世界』（日本放送出版協会），『ことばの詩学』（岩波書店），『詩学と文化記号論』（筑摩書房），『記号論への招待』（岩波書店），ウルマン『言語と意味』（大修館書店），サピア他『文化人類学と言語学』(弘文堂)，エーコ『記号論Ⅰ，Ⅱ』(岩波書店)，ダンダス『民話の構造』(共訳：大修館書店)，クワーク他『現代英語文法――大学編』（紀伊國屋書店），ボウグランド他『テクスト言語学入門』（共訳：紀伊國屋書店），リーチ『語用論』（共訳：紀伊國屋書店），『ことばのふしぎ，ふしぎなことば』（筑摩書房，1987），クワーク著『ことばの働き』（共訳，紀伊國屋書店，1988），*Discourse Analysis in Japan*（編，*Text* 9-3，1989），ダンダス編『シンデレラ』（共訳，紀伊國屋書店，1991），*The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture*（編，John Benjamins，1991），など．

「する」と「なる」の言語学
―言語と文化のタイポロジーへの試論―

© Y. Ikegami 1981

1981年7月1日　初版発行
2000年11月1日　10版発行

著者　池上　嘉彦
発行者　鈴木　荘夫

発行所　株式会社　大修館書店
(101-8466) 東京都千代田区神田錦町3-24　振替 00190-7-40504
電話 03-3295-6231（販売部）／03-3294-2356（編集部）
［出版情報］ http://www.taishukan.co.jp

印刷／壮光舎　製本／三水舎　装幀　近藤敬三
ISBN4-469-22032-9　Printed in Japan

目

次

プロローグ……1
具体的なものごとの表現と抽象的なものごとの表現……5
理論的な枠組……11
いわゆる「場所理論」の系譜……11
「場所理論」の延長の可能性……22
共通の構造型の存在への示唆……25
「ボクハウナギダ」に関する断章……35
「ノデアル」「テイル」に関する断章……47
「テイル」と英語の進行形……55
「ノデアル」と英語の対応する表現……65
'*BE*-language' と '*HAVE*-language'……69
〈変化〉と〈状態〉の分類とその構造型 (1)……79
〈変化〉と〈状態〉における〈具体〉と〈抽象〉……79
〈具体〉と〈抽象〉の曖昧さ……85

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「夜サリ」と 'The evening comes'……89
〈所有〉の概念の中間性……92
二つの記述モデル……94
〈変化〉と〈状態〉の分類とその構造型 (2)……101
Y＝〈中心点〉対Y＝〈非中心点〉による分化……102
X＝〈主題〉対Y＝〈主題〉による分化……105
〈Y＝主題〉の場合の構造型の分化……109
〈Y＝主題〉型の表現における二方向への解釈の可能性……114
〈起点〉と〈到達点〉の非対称性に関する断章……121
言語における〈到達点〉指向性(a)……121
日本語の「ニ使役」と「ヲ使役」……135
言語における〈到達点〉指向性(b)……140
〈到達点〉指向性への反例(?)……158
〈起点〉と〈存在点〉の中和……161
〈起点〉を含む表現の構造型……171
〈使役〉と〈受身〉の構造型 (1)……181

埋め込みを含む構造型としての〈使役〉と〈受身〉……181
〈動作主〉—〈経験者〉と〈使役〉—〈受身〉……187
反使役動詞としての HAPPEN……194
「ナル」の機能……197
〈動作主〉の〈場所〉化……200
「擬人法」の自然さと不自然さ……204
〈使役〉と〈受身〉の構造型 (2)……209
構造型の規定……209
〈能動態〉と〈受動態〉……213
「能格型」言語と「対格型」言語……226
対照研究のための枠組としての構造型……239
〈する〉的な言語と〈なる〉的な言語……249
〈場所の変化〉と〈状態の変化〉……249
〈もの〉と〈こと〉……256
〈運動〉のイメジ……261
「運動の動詞」と「行為の動詞」……263
二つの言語類型……280

エピローグ……284
引用文献……292
あとがき……298
索　引……304

プロローグ

さまざまな言語について書かれたものを読んでいると、その中に奇妙に繰り返し現われてくる一つのテーマのようなものがあるのに気づくことがある。例えば、次のような箇所である。

「一つの見方では、出来事はもっぱらある行為者（Täter）に依存するものとして（つまり行為者によってひき起こされるものとして）現れる。もう一つの見方では……出来事（Geschehen）そのもの……に対して、より多くの注意が向けられる。」（Weisgerber：1963：48）

「日本語ではとかく物事が『おのずから然る』やうに表現しようとする傾向を示すのに対して、英語などでは『何者かがしかする』やうに、さらには『何者かにさうさせられる』かのやうに表現しようとする傾向を見せてゐる……。」「ヨーロッパ風の表現における……特色を、かりに人間本位的といふならば、日本語におけるものは、むしろ自然本位的あるひは非人間的ともいへる……。」（佐久間、一九四一、三四、三二）

「印欧語の言語表現では、行為そのものを何らかの主体と結びつけない限り……陳述として提示することができない。一方、日本語では、過程(Vorgang)それ自体として捉え、表現するということが行なわれる。」「印欧語における使役主的な行為者（Täter）主語に対応するのは、日本語では一つの過程が属する領域である。」(P. Hartmann : 1952 : 71, 115)

「印欧語……では、二つの部分〔名詞＋動詞〕から成り立つ文型がきわめて目立った地位を占めている。……この対立は、論理学では、主語と述語、行為者（actor）と行為……などと……述べられて来た。……これらのうちの一方はそれだけで存在しうるが、動詞という部類はもう一方の部類、つまり、『もの』の部類に属するものをひっかかりとしないと存在できないという考え方がしっかりと根を下ろしてしまった。」「ホーピ族の小宇宙は現実を『出来事』(event)（あるいは『起こること』(eventing) と言った方がよい）という観点から分析を行なって来たように思われる。」(Whorf : 1956 : 241, 147)

「印欧語的な考え方では人間的な『我』(Ich) が『主語』として行為をひき起こす点として感じられるのであるが、〔アイルランド語では〕それが後面に退き、有無を言わせぬ過程（Kraftvorgang）の中に巻き込まれてしまうのである。」(H. Hartmann : 1954 : 33)

「〔エスキモー語では、動詞は〕一つの過程（Vorgang）を表わすという点で意味的な特徴が認められる。つまり、主体を表わす語と過程を現わす語ということだけについての対立は、それ自体として存在しないのである。」(Hammerich : 1936 : 44)

「〔マレーシアの言語では〕動詞は過程そのものの開始を表わすだけで、それを主体の力と明確に結びつけたり、それによって影響される客体との関連を動詞の形態そのものではっきりと示したりすることはない。」(Cassirer : 1923〔1954² : 220〕)

「そこ〔バスク語〕では、行為は行為との関連から切り離されて、ちょうど〔行為〕名詞においてそうであるように、それ自体として提示される。」(Martinet : 1958 : 386)

「〔ウィンツー語の〕第二類の動詞は、個人が自由な行為者でないような状態を示す。この部類の動詞に基く陳述では、注意は行為者 (actor) にではなく、出来事 (event) …… の方に向けられているのである。」(Lee : 1938 : 95)

それぞれ独立になされた発言であるにも拘らず、以上挙げたいくつかの引用にはある種の共通した主張を認めることができよう。以下で行なってみたいのは、この共通した主張を、それとは一見何の直接のかかわりもないと思われる一つの考え方――「場所理論」(localist theory) と呼ばれるものの延長――に基いて検討してみるということである。その間、途中で何度も横道にそれて、いくつかの関連問題を考えてみることになろう。最終的には、そのような主張の妥当性、ならびにそのような主張が言語理論の構成に対して持ちうる意味合いといったことと並んで、「場所理論」と言われる考え方それ自体の妥当性ということにも議論が及ぶはずである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

具体的なものごとの表現と抽象的なものごとの表現

具体的なものごとについての表現が抽象的なものごとの表現に転用されるということがある。これは従来、語の意味変化についてよく言われて来た。例えば「机ヲ動カス」―「心ヲ動カス」、「金ヲ払ウ」―「注意ヲ払ウ」、「人ガ急イデ行ク」―「仕事ガウマク行ク」、「水ガ浅イ」―「考エガ浅イ」、「甘イ菓子」―「甘イ言葉」などでは、それぞれ前者の方が具体的、後者の方が抽象的な表現である。（つまり、机の「動き」は眼で見えても、心の「動き」そのものは（その「表われ」は別として）視覚の対象になるようなものではないし、「甘い」菓子は舌で味えても甘い言葉はそうは行かない。）「分ケル」と「分カル」、「起キル」と「起コル」、「行ク」と「ヤッテ行ク」、「抜ク」と「スッパ抜ク」などでも前者が具体的、後者が抽象的であり、後者としての用法は前者からの派生とされる。

一般に、具体的な意味が抽象的な意味に変わるのはその逆の場合より遙かにふつうというのはほぼ

普遍的なことというのが定説のようである。十七世紀の哲学者ロックが comprehend（〈一緒につかむ〉→〈理解する〉）、adhere（〈～に付着する〉→〈執着する〉）、instill（〈～の中に滴らす〉→〈少しずつ教え込む〉）などの語を取りあげ、これらはすべて「感知可能な対象の作用から取られ、ある種の思考の様式に適用された」ものと述べたのは、よく知られていることである（Locke：1690）。言語学者のブルームフィールドもその著『言語』の中で次のように言っている。

「意味変化を広く調べてみると、洗練された抽象的な意味は大体においてそれより具体的な意味から生じるということが分かる。…例えば、understand〈分かる〉はもともと〈～のそばに立つ〉ないし〈～の間に立つ〉という意味であったようである。」（Bloomfield：1933：429）

ウルマンも、意味論の分野における普遍性の一つとして、「具体から抽象へ」という意味変化の傾向を挙げている（Ullmann：1963：242）。

また、幼児の言語習得の過程においても、具体的な意味の語の習得が抽象的な意味の語の習得に先行するというのがほぼ定説のようである。ブラウン（Brown）は、この点を次のようにまとめている。

「幼児における語彙の発達を見ると、具体的なものから抽象的なものへ、狭くて具象性の高い範疇から広くて具象性の低い範疇へ、そしてさらに心理的な範疇へと進んで行くのが確かに認められる。」（Brown：1958：278）

なお、アングリン(Anglin 1970：99)も参照。ただし、言語習得について〈具体〉から〈抽象〉ということが言われる場合には、〈下位概念語〉から〈上位概念語〉ということと、〈具象的〉なものを表わす語から〈非具象的〉なものを表わす語ということとが、必らずしも常に十分区別されていないことに注意しておく必要がある。例えば、「自動車」や「電車」というような語に較べると「乗物」というようなそれらよりも「抽象的」な語の習得は遅いという場合は前者である。一方、同じ疑問詞であっても、すぐそこに見える具体的なものを指しての「ナニ」の使用は比較的早くても、「イツ」や「ナゼ」のように直接眼に見えるとは限らないことに関係する語の使用はそれより遅れるのがふつうであるが、これは後者の場合である。以下で問題になるのはこの後者の意味での〈具体〉と〈抽象〉ということであるが、いずれにせよ、この場合も〈具体〉が〈抽象〉に先行する。

ここでもう一度、〈具体的〉なことの表現が抽象的なことの表現に転用される例としてこの節の冒頭で挙げたものに立戻って考えてみよう。そこで一つすぐ気がつくことは、動詞の意味が具体的なものから抽象的なものに転用されるということは、その動詞が結合の相手として選択する名詞の意味特徴が〈具体〉と〈抽象〉のいずれであるかということと重要な関係があるということである。例えば、〈具体〉的な行為を表わしている「机ヲ動カス」とか「金ヲ払ウ」という表現では、動詞と関係している「机」や「金」という項も〈具体〉的である。一方、〈抽象〉的な行為を表わす「心ヲ動カス」とか「注意ヲ払ウ」という表現では、動詞と関係している「心」や「注意」という項も〈抽象〉

的である。そうすると同じ動詞についてこのように〈具体〉的と〈抽象〉的な表現が対応して存在する場合、動詞の意味は言わば一つの枠のように一定に保たれていて、その枠に〈具体〉的な項が入れられるか、〈抽象〉的な項が入れられるかによって、表現全体が〈具体〉的にも〈抽象〉的にもなるというふうに考えることすらできそうである。

この点は、それ自体意味内容の希薄な語を取りあげて考えてみればもっと明瞭である。例えば、英語の前置詞の in には、辞書によると(1)〈場所〉(in the room)、(2)〈時間〉(in the morning)、(3)〈状態〉(in danger) などの意味が分類してある。しかし、この三つの意味に関する限りで言えば、in という語自体が表わしているのは、あるものがある枠の中に存在しているということだけであり、ただその枠が〈部屋〉(room) のように場所的なものか、〈朝〉(morning) のように時間的なものか、あるいは〈危険〉(danger) のように状態（つまり、抽象的な場所）的なものであるかによって、それぞれ辞書に示されているような意味の違いが出てきていると考えることができる。

動詞は前置詞などと較べると一般に意味内容の構成が多かれ少なかれ複雑であるので、それが〈具体〉的な項と結びつく時と〈抽象〉的な項と結びつく時とでは、枠となる意味構造の上でもいくらか差が出てくるものである。例えば、「机ヲ動カス」では行為の対象となる机は場所的な移動を伴なうが、このことは「心ヲ動カス」の場合の心には当てはまらない。また、「金ヲ払ウ」では金は相手の所有になるが、「注意ヲ払ウ」で注意が相手の所有になる（したがって、払った人は所有しなくなる）

ということにはならない。

しかし、一般に比喩的な転用が起こる場合は、ある二つの過程の間に少なくとも何らかの平行性が意識されているわけである。従って、その限りにおいての共通の枠組といったものは存在していると考えることができる。この想定を一般化した形で取りあげようとするならば、先程の前置詞の場合からも想像のつく通り、意味内容のできるだけ一般的な動詞（言いかえれば、できるだけ多くの他の動詞に共通する意味成分だけを意味とする動詞）について検討してみるのが有効であろう。例えば、英語で言えば go とか come、be や become や make、それに do などはすぐ思いつくその種の動詞である。これらの動詞についてまず基本的ないくつかの枠組を抽出することができるならば、他の動詞の場合はその基本的な枠組のどれかにもっと細かい条件がつけ加えられるという形でその意味構造の記述ができるはずである。しかも、文の意味的な構造の中心となるのは主語ではなく実は述語を構成する動詞であって、その動詞がそれとある種の格関係に立ついくつかの名詞句をとるという形で規定させるのであるという考え方をとるならば、右に述べたような基本的な動詞について抽出される枠組はとりも直さず文の基本的な意味構造でもあり、それによってすべての文の構造が説明されるような性質のものであるとすら言える。

しかし、この点についてさらに話を進める前に、言語学史上「場所理論」と呼ばれるものについて、その性格と流れを検討しておきたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c